朝日新聞 1999年(平成11年)4月23日 金曜日

卵子提供で生まれた2人の子へ ママが「特別の物語」話しましょう

結婚後気づいた不妊 若い時の自分に似た人探し

あなたたちは…最愛の人

ひとつの「家族」が記念撮影でカメラに収まる。和美さん（右端）とマークさん（中央）、ジェニファーさん（左端）、実和ちゃん、賢君／小野寺洋一米国カリフォルニア州サンフランシスコで

子しかいのわだかまりを抱えた母の気持ちるところに、いつも思い我が子たちがいる。この二人の子どもに、自分たちの「出生」の不思議を、いつ、どう伝えたらいいのだろう――と考える。

（小野 高遠）

米国・カリフォルニア州に暮らす和美・ハート・マシュマイヤーさん（35）と、夫マークさん（40）の一日は、こうして始まる。

長女は学一リーン・実和ちゃん（7）。長男はエバレット・賢君（2）。

不妊に悩んだ和美さんは、二十代のころの自分と周りの人々を振り返ってもらい、実和ちゃんを出産した。そして二年半後、「次のとき」のために、凍結保存しておいた残りの受精卵を解凍して体内に移植し、賢君を産んだのだ。

和美さんはこう語った。

「私のおなかから出てきたということは、物心がついた実和はもう知っています。同時に、私の小さな体を使って、この子の卵子と体外受精させ、自分のおなかで出産しようと考えた。

しかし、アジア系の女性の提供者はなかなか見つからなかった。

米国では、日本などからやってくる不妊の夫婦は多い。だからアジア系の卵子提供者を探し回ったが、ついに見つけだすことはできなかった。

半年後、大学を卒業したばかりの中国系アメリカ人のジェニファー・フォイさんに会った。

卵子提供を申し出てくれた彼女の写真に驚いた。髪の毛、目もと、口もと、顔全体の雰囲気がそっくりだった。通った大学も同じだ。

●●●

運命の出会いだ。

ジェニファーさんから二十個の卵子をとった。受精に成功し、使えるのは十二個もあった。そのうち四個を体内に移植した。

そして、出産。看護婦から「真っ赤な赤ちゃんを初めて見せられたとき、この子はだれの子だ」と、とっさに思った。でも、答えはすぐに出た。

「卵子提供してくれたあの女性の子どもだ」と。

結婚の際の「契約」が破棄されるときは、まもなくやってきた。

結婚後に生まれた残りの八個の受精卵のうち、使える七個を体内に移植した。凍結受精卵による「二回目出産」。そして、無事出産した。

一回目は一家とジェニファーさんは会う。そんな関係を、マークさんは「他人はおのようなものだ」と表現する。

ジェニファーさんも言う。

「子どもたちは、私が手を差し伸べても、お母さんのところへ行ってしまう。もちろん、自分の卵子を使っているから何かあるとは思います。でも、結局、子どもとのきずなって育ちの問題なのかな」

●●●

出産した少女とその母親の物語は、平凡な言葉で事実を淡々とつないでいく。そして、こんな言葉で終わるつもりだ。

「それでね、少女のお母さんは少女に『卵子の人』という意味をとって、ダーリーンと名付けたの」

物語を聞いた実和ちゃんは、きっと「ありがとう」という言葉を返してくれるだろう。

そのとき、賢君もいるはずだ。

まもなく、その時がやってくる。

＊使用している記事などに問題がある場合はIFC宛て御連絡ください。